

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：32690

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24500329

研究課題名(和文) 日本語話者好みの&lt;主観的把握&gt;に基づく表現性と&lt;相同性&gt; 認知類型論的考察

研究課題名(英文) 'Subjective Construal' as Japanese Speakers' Favorite Type of Locutionary Stance and Its Expressive Potentialities and Homologues - A Cognitive Linguistic Approach

研究代表者

守屋 三千代(Moriya, Michiyo)

創価大学・文学部・教授

研究者番号：30230163

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は<主観的把握>の傾向に基づき、日本語話者が文芸・言語形式・視覚文化の分野でどんな表現的志向性を見せるか、それらがいかに相同的かを検証したものである。日本語話者は注目に値する現前の<見え>を「しるし：sign」として主体的に捉え、そこから非現前の<見え>を創出するとともに、形式的には様式化(例えば<見立て>)を洗練させながら、<見え>の発信と受容を促す共感のハビトゥスも編み出した。こうした表現をめぐる認知的行為は古代の万葉集に発して現代に至るが、<主観的把握>の傾向のある言語話者や、日本に影響を与えた中国語話者の言語・文化では未だ観察されていない点で、本研究は日本文化の独自性を示唆する。

研究成果の概要(英文)：The study starts from the assumption that 'subjective (i.e. subject-object merger type of) construal' is Japanese speakers' 'fashion of speaking', explores the range and varieties of expressivity manifested in verbal and visual arts as well as in language use and considers to what extent 'homology' can be posited across different cultural areas. Already in ancient times, speakers are observed to take the image of a scene before their eyes as a 'sign' for something not in their presence or to superimpose the image in their mind's eye on the image of the scene before their eyes; a disposition which they later developed into a device of 'mitate' applied across various cultural areas. At their mutually interactive level, they also developed a 'habitus' of corresponding mutually mind-to-mind empathetically through the visual images they were supposed to share. We have so far ascertained that something analogous is hardly attested with Chinese speakers.

研究分野：認知言語学

キーワード：認知言語学 事態把握 主観的把握 見え 見立て 相同性 認知類型論 文化記号論

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、認知言語学の主要概念である<事態把握>に基づく研究である。開始に先立ち、研究代表者・分担研究者はこの概念に着目して研究を進めてきた。すなわち、「日本語話者の<事態の主観的把握>と『語り』と『読み』」(平成21~23年度基盤C21500263)では、日本語話者の事態の<主観的把握>の概念から日本語文法の特徴が得られる道筋を示し、<事態把握>のあり方が言語形式と結びつき、文法や談話構成の軸をなすことを検証した。また、日本語話者の<主観的把握>の傾向は、「語り」においてだけでなく、文章を「事態」として捉える「読み」においても観察され、このことが日本語の物語・小説や和歌・俳句等の韻文、批評の成立に深く関わっていることを示した。さらに、日本語話者の<主観的把握>の傾向は、学校教育の国語科において育まれてきたことを教科書や指導書から検証するとともに、児童・生徒に対して画像や文章の読み込みをめぐる調査を行い、学齢期で既に<主観的把握>の傾向が見られることを明らかにした。

以上に基づき、<主観的把握>がさらにどのような表現と結びつか、様々な文化との<相同性>が見られるか、という研究の方向性を有するに至った。この点を考える上で、有効なヒントとなったものとして、池上2006(『英語の感覚・日本語の感覚』日本放送出版協会)で指摘された、日本の庭園や絵画と西洋のそれとの相違が、<事態把握>の仕方の相違を端的に現していること、北山修2005(『共視論』講談社)の指摘のように、日本の母子像を描いた浮世絵の多くは、日本語話者の特徴である共同注意の体勢をとっている点で西欧のそれと異なることなどが挙げられる。ここにおいて、日本語話者の<主観的把握>の傾向に基づいて、様々な日本語・日本文化の表現が実現すること、さらに、こうした認知的な志向性を介して、文芸や視覚文化との<相同性>が観察されることが予想され、本研究の方向性が得られ、文化記号論を視野に入れた研究を進めるに至った。

## 2. 研究の目的

- (1) <主観的把握>を反映した表現には、どのようなものがあるか、言語、文芸、および絵画や茶道・華道・演劇・作庭などの日本文化について考察を進める。
- (2) 日本文化の<見立て>という文化的キーワードに着目する。<見立て>は比喻と一見似た表現手法であるが、文芸および日本の視覚文化において幅広く見られ、概念化を経ず、創出者・鑑賞者双方の自在な体験的理解に基づく点で異なる。この<見立て>の構造とその表象が、日本

語話者の<主観的把握>とどんな関連性があるかを明らかにするとともに、比喻との相違がどこにあるかを明らかにする。

- (3) <主観的把握>を介し、言語表現と視覚的な様々な日本文化の間には、どのような<相同性>が見られるかを検証する。
- (4) <見立て>をはじめとする日本語話者の表現手法が、歴史的にいつ頃に発生し、その後いかに展開したかを検証する。
- (5) 日本の言語や文化に影響を与えた中国語話者や、日本語話者と同様<主観的把握>の傾向が見られる韓国・トルコの母語話者にも、<見立て>をはじめとする日本語や日本文化の表現手法と類似の手法があるか、認知類型論的に分析する。

## 3. 研究の方法

言語については、これまでの成果に基づいて資料を収集し、英語・中国語・韓国語・トルコ語との相違を視野に入れて検証を図る。<見立て>については、先行研究を<事態把握>という観点から捉え直し、<見立て>をめぐる言語表現およびそれ以外の日本文化の間には<相同性>が見られるかを視野に収めながら、具体例に即して検証する。視覚文化については、特に<見立て>との関わりの深い茶道をめぐる文化を中心として、文献にあたりるとともに、専門家にインタビューを行い、認知言語学的な分析を試みる。<見立て>をはじめとする文芸の表現については、古典にあたり、日本語話者の表現手法を歴史的に遡り、その発生と展開を認知言語学的に捉え直す。同時に、中国の母語話者や韓国・トルコの話者の協力を得て、日本の表現手法と同様の手法が見られるか検討を行い、認知類型論的な考察を進める。以上をふまえ、さらにこれまでの研究を概観し、日本語話者の表現における特徴がどこにあるか、言語をはじめ、文芸や視覚文化について、再検討を行う。

## 4. 研究成果

本研究代表者の守屋の研究成果は、以下の通りである。

- (1) <主観的把握>の概念に基づき、日本古来の文化的手法である<見立て>について考察を試みた。その結果、両者には深い関わりがあることが予想された。そこで、<見立て>の種類、および概念について、様々な分野ごとに、先行研究および具体例にあたり、認知言語学的な観点から考察を進めた。

<見立て>とは、現前の<見え>(近景)を極めて主観的かつ主體的に捉えることから、新たな非現前の<見え>(遠景)を創出したり、それを言語化命名したりする表現手法である。すなわち、現前に非現前を見立てる(現出する)ものである。こうした<見立て>は、まず万葉集に現れ、古今集で極めて顕著に観察される。その代表例の一つに、天から落ちてくる雪を春の花(桜)に見

立てた「冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやあるらむ」(清原深養父)という和歌がある。こうした<見立て>の手法は和歌では数多く見られるが、日本全国にある「富士」という命名や、茶道具における「不二山」「木守り」などの銘の付け方にも、同様の<見立て>の手法が観察される。

ちなみに、「富士」という命名法は、外国ではあまり見かけないとされるが、日本では300以上の例があり、しかも近世の江戸では、「見立て富士」と言って、富士山の形の小山を富士山に見立てて作り、そこに登ることで富士講に代えるということを盛んに行っており、浮世絵にも描かれている。つまり、見立てられた富士は比喻に留まらず、実際に登り、信仰体験できる具体的対象である。このことは<見立て>が体験的理解と結びつき、生活に生きていることを示唆している。

<見立て>には上記のように現前から非現前を見立てる手法にだけでなく、非現前の<見え>を目指して現前の<見え>すなわちモノを異なる目的で用いたり、創作したりする、創造的手法としての<見立て>もある。前者の典型例に、利休に始まる民器の茶道具への利用法があり、例えば瓢箪や竹を花器に、薬瓶を茶入れに用いたりしている。後者の典型例には、茶席に用いられる和菓子がある。こうした和菓子は茶席という文化的なしつらえに相応しい姿と銘を持って創作され、その姿が現前であり、銘が非現前の見立てられた<見え>へのしるしとなっている。例えば、白い餡の下に緑の餡を配した「下萌え」は、雪の下の芽吹きに見立てられている。こうした読み解き方を見る者に求める点に、日本文化の受け手責任性も現れていよう。

ちなみに、日本の伝統文化において、<見立て>をはじめとする文化的記号や様々な約束事は、初めてそれに接した者にはわかり難いものである。この点で、芸道の流派は、モノの文化的記号を読み解くための手法を身につけさせる、一つのシステムであると考えられる。日本の茶道も華道も、抽象的理解よりもまずは視覚的・体験的理解を目指し、その理解の過程がハビトゥスとして身につくことを目指していると考えられる。

(2) <主観的把握>に基づく<見立て>は、いかに言語形式に現れているかについて、まず着目した点は、現前と非現前の二重の<見え>を重ねる構造を持った、日本語の複合語である。日本語の複合語には、中国語の複合語のように二つの事態が時間的な前後関係や因果関係、並列関係にあるといった論理構造を有するものも数多く見られるが、これらと異なる構造、すなわち、現前の事態と、そこから自在に連想・仮想された非現前の事態から成る、二つの<見え>を一語に収めるといった語彙構造が顕著に観察される。

こうした例として、複合動詞では、「言いよどむ」「切り立つ」「押し黙る」「咲き誇る」「言い立てる」「書き殴る」「笑い崩れる」な

どの例が、複合名詞では、「大根足」「紙吹雪」「煎餅蒲団」「月見うどん」などの例が挙げられる。ちなみに、<客観的把握>の傾向のある外国語話者から見ると、上記のような複合語は、論理的関係の観点では捉えにくいのに加え、具体的な<見え>を彷彿とさせることに、複合語で表現することの主眼があるという、まさに<主観的把握>に基づく営みであることが理解し難く感じる場合が多い。このことは逆に言えば、日本語の<主観的把握>と、こうした現前と非現前の<見え>から成る複合語の構造の表現性との結びつきの緊密さを、明確に示していると考えられる。

(3) 近世の絵画などを見ていくと、<見立て絵>をはじめ、数多くの<見立て>の手法による創作が観察される。これと同時に、必ずしも<見立て絵>ではなく、独立した二枚の<見え>が拮抗する形で重ね合わせられる狭義の「ダブル・イメージ」の表現手法も観察される。絵画で言うと、葛飾北斎「神奈川沖裏波」、本阿弥光悦「鶴岡下絵三十六歌仙和歌巻」、俳句では芭蕉の「荒海や佐渡に横たふ天の川」や曾良「卯の花に兼房みゆる白髪かな」などがその例として挙げられる。こうした手法も、近世から現代にかけて数多く観察される。ここにおいて、<見立て>か否かを問わず、日本語話者が現前の<見え>へのこだわりを持ち、非現前の<見え>との二つで一つの世界を創出する志向性があることが確認される。なお、西洋絵画に伝統的に見られる遠近法とは異なり、二枚の<見え>から成る平面的な画面構成は、近世の浮世絵から始まり、現在の日本のアニメ・シジョンや漫画の世界においても同様に観察される。

(4) 現代日本語の文法の分野では、推論の表現をする際に、現前の<見え>から非現前の<見え>を創出することで、推論に相当する表現を行う志向性が観察される。すなわち、「の」「よう」「らしい」などの「徴候性判断」と呼ばれる文法形式は、客観的推論の表現を志向する「だろう」と異なり、現前の<見え>に対し時間的に後続・先行・同時進行する、非現前の<見え>を重ねる表現であり、いわば<見立て絵>に似た構造を持つと言える。

例えば水着を入れたバッグを持っている人に「プールに行くの?」と尋ねたり、陽に焼けた顔をして、髪が濡れている人に「プールに行ったの? / プールで泳いだの?」などと指摘したりするのは、心の目に非現前の<見え>を彷彿とさせながら現前を指摘する表現である。夕焼けを見て「明日もいい天気ようだ」と言うのも、現前の<見え>を眺めたり、天気予報を聞いて一定の情報を得たりして、非現前の映像が浮かんでいるという表現であり、「明日はいい天気でしょう」が必ずしも空を眺めながらでなくても言えるのと、対照的である。「の」の文も「ようだ」の文も、確実な根拠に基づく推論というより、現前の見えから、自由に非現前の<見え>を思い描いて見せるような表現である。

ここで重要なことは、現前の〈見え〉とは非現前の〈見え〉を彷彿とさせるようなものだという「イマ・ココ」に拘るスタンスである。この背後には、「非現前の仮想であれ、見えることは信じられる / もう一つの現実である」とでも言わなければならない、日本語話者の見ることへの価値観がある。同時に、日本語話者は現前の〈見え〉が非現前の〈見え〉へと誘導する記号: sign として機能すると考えていることも示唆する。従来、日本語は聞き手責任的だと言われてきたが、日本語及び日本文化において、聞き手・受け手は極めて主体的かつ自在に、理解・鑑賞し、そこに自己表現も込められていると考えられる。

(5) 以上のような日本語話者の〈見立て〉に代表される、現前と非現前から成る、表現的志向性は、日本の言語・文化に大きな影響を与えた中国や、日本と同様〈主観的把握〉の傾向が観察される韓国・トルコにおいては、協力者とともに同様の現象があるか検討を試みたが、現段階では未だ見つかっていない。この点を検証することは、極めて興味深いとともに、今後の重要課題であると考えられる。

本研究分担者である池上の研究成果と展望は Ikegami (to appear) で提示されている。出発点として、〈主観的把握〉(つまり話者が言語化しようとする事態の中に自らの身を置き、〈主客合一〉のスタンスで事態を〈体験的に把握しようとする〉こと) が日本語話者の(例えば欧米系言語の話者と対比して)特徴的であるという事実が確認できるとして、そのような性向は古い時期の日本語話者についても同様に確認できることなのかという問題がある。しかし、このような問題提起は上古日本語の口語的な資料の欠如という越え難い困難と遭遇する。そのような限界を十分に認識した上で、一つの資料として『万葉集』における表現について当たってみたところ、これが予想外に興味深い知見を得ることを可能にしてくれたと感じている。

伝統的には、『万葉集』では(例えば『古今集』の場合と比較して)〈実景〉が詠まれるということがしばしば指摘されてきた。これはとりも直さず、〈主客合一〉的なスタンスで〈事態把握〉がなされるということ。例えば、「田子の浦ゆ打ち出せば見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りたる」(381)という作品は、作者が富士山を、目のあたりにして(あるいは少なくともそういう建て前で)詠んだものということである。このことからすぐ気づかされるのは、『万葉集』における和歌では、〈主客対立〉的な事態把握のスタンスは、最近言語類型論で〈証拠性〉(evidentiality)と呼ばれる文法概念との関連で注目を集めている(Linguistic Typology 12(2013), Journal of Pragmatics 33(2001)の特集など参照) 'mirativity' (日本語の術語としての訳語はまだない) 話者が予期することなく、驚嘆するに値するような事態に遭遇するという体験 言語によってはそのた

めの特別の文法的標識を有しているものがある一方、そうでない言語でも何らかの正常ではない形式の表現での言語化と結びつきうる、例えば、英語での正常の 'The ship goes down.' に対しての 'Down goes the ship!' という表現参照)と呼ばれる(話者が言語化しようとする事態に認められる)特徴によって誘発されているということである。

この認識を踏まえてさらに検討を拡げていくと、さらにもう一步深化させられた事態把握が頻出していることに気づく。それは 'mirative' と受けとめられた事態がただそれ自体として 'admiration' の対象とされるということとどまらず、それが何らかの〈非現前〉の別の事態の存在を暗示する〈しるし〉(sign)として読みとられるという方向への展開である。(この点に関しては Ikegami, ed. (1991) に収録の Toyama (1991) 参照。最近の Miyajima et al., eds. (2014) の資料で検索してみても、『万葉集』における「しるし」という語の使用頻度は、『古今集』や『新古今集』と比べてみても、十分有意義に高いことが読みとれる。) 一つの具体例として、「桜田へ鶴鳴き渡る年魚市湊(あゆちがた)潮干にけらし鶴鳴き渡る」(271) という和歌では、桜田へ向かって鶴が鳴きながら飛んでいくというのが目の前の実景、それが作者によって年魚市湊で潮が引いていきつつあるという非現前の、しかし、もし作者がその場にいたら実景として指しうる光景を暗示する〈しるし〉として受けとめられているわけである。そこでは、現前の実景が非現前の実景とメトニミーの関係で結びつけられている。

『万葉集』の後期に向けて次に出てくるのは、現前の実景と非現前の実景を結びつけるということの代わりに、現前の実景に非現前の虚景を重ねるという型の事態把握である。例えば、比較的早い時期のものとして「わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れくるかも」(822)がある。ここでは眼前に見る梅の花の散りいくという光景に、雪が降るといふ虚景が重ねられている。重ねられているという意味で、ここでは実景と虚景がメタファ的に関係づけられているわけである。この手法は、『古今集』を経て〈見立て〉と呼ばれる事態把握の型として成長していく。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計14件)

守屋三千代、池上嘉彦、「現前」と「非現前」の〈見え〉を重ねる〈事態把握〉、日本認知言語学会論文集、査読有、第15巻、印刷中

守屋三千代、日本語における二重構造の示唆するもの 日本語話者の〈主観的把握〉と表現性、創価大学日本語日本文学、査読無、第25巻、2014、29-40

IKEGAMI, Yoshihiko, Subject-Object Contrast and Subject-Object Merger in 'Thinking for Speaking'—A

Typology of Cognitive Processing in Linguistic and Its Homologies in Pictorial Encoding, Chinese Semiotic Studies, 査読有、6-2、2014、215-228

池上嘉彦、守屋三千代、山口富蔵、テキメン・アイシェヌール、百留康晴、百留恵美子、〈見立て〉：送り手と受け手の間での意味創出の営み 文化記号論の試み、日本認知言語学会論文集、査読有、第14巻、2014、525-531

守屋三千代、日本語のモダリティ再考 〈事態把握〉の表現性から考える、北京大学日本語文法教育シンポジウム論文集、査読有、第23巻、2013、33-45

守屋三千代、モダリティをめぐる日中対照研究 〈事態把握〉の観点から、漢日言語学研究論叢、査読有、第13巻、2013、133-145

池上嘉彦、守屋三千代、百留康晴、百留恵美子、〈見立て〉から考える日本語と日本文化の〈相同性〉、日本認知言語学会論文集、査読有、第13巻、2013、624-647

守屋三千代、現代日本語のナル表現「ナル文」と「ラレル文」のイメージ・スキーマ、日本認知言語学会論文集、査読有、第12巻、2013、537-542

守屋三千代、池上嘉彦、日本語話者の〈事態把握〉の実態 児童・生徒に対する調査について、日本認知言語学会論文集、査読有、第12巻、2012、432-438

守屋三千代、〈事態把握〉と語順をめぐる日中対照研究、漢日対比言語学検討会論文集、査読有、第3巻、2012、196-205

守屋三千代、日本語のモダリティ再考 〈事態把握〉の表現性から考える、日語語法教学研究、査読有、第1巻、2012、178-187

池上嘉彦、〈言語の構造〉から〈話者の認知スタンスへ〉 〈主客合一〉的な事態把握と〈主客対立〉的な事態把握、国語と国文学、査読無、11月号、2012、3-17

守屋三千代、日本語における〈見立て〉の表現、創価大学日本語日本文学、査読無、第23巻、2013、1-14

IKEGAMI, Yoshihiko, Empathy and Responsibility—How to Come to Term with Haiku Poems, Philologica:

Studies Universitatis Babe Belyai, 査読無、LVIII-1, 2013, 5-11

[学会発表](計30件)

IKEGAMI, Yoshihiko, Some Topics in Linguistic Typology from a Cognitive Linguistic Perspective, Department of English and Linguistics, 2015/02/13, Masaryk University, Austria

守屋三千代、ダブル・イメージの日本語

と日本文化、アンカラ大学日本語日本文学科主催講演会、2015/01/06、アンカラ大学、アンカラ(トルコ)

IKEGAMI, Yoshihiko, What we See When We See Flying Cranes: Motion or Transition?, アンカラ大学日本語日本文学科主催講演会、2015/01/05、アンカラ大学、アンカラ(トルコ)

守屋三千代、日本語とトルコ語の〈事態把握〉と「ナル表現」、アンカラ大学日本語日本文学科主催講演会、2015/01/05、アンカラ大学、アンカラ(トルコ)

池上嘉彦、〈視点〉から〈事態把握〉へ 〈自己口化〉の言語学と詩学、大東文化大学大学院学術講演会、2014/11/29、大東文化大学、東京

守屋三千代、池上嘉彦、「現前」と「非現前」の〈見え〉を重ねる〈事態把握〉、第14回日本認知言語学会全国大会、2014/09/20、慶應大学、東京

IKEGAMI, Yoshihiko, Superimposing the Image in One's Mind's Eye on the image of the Scene Before One's Eyes—Favorite Type of Construal by Japanese Speakers, The 14<sup>th</sup> Conference of the European Association for Japanese Studies, 2014/08/29, University of Lubiana, Slovenia

池上嘉彦、文化記号論と相同性 日本文化の場合、韓国日本研究団体第30回国際学術大会、2014/08/22、誠信女子大学、ソウル(韓国)

守屋三千代、現前と非現前を結ぶ機能、漢日対比言語学会、2014/08/21-2014/08/21-2014/08/21、人民大学、北京(中国)

池上嘉彦、言語と文化の相同性 文化記号論的試み、牧野成一名誉教授PITディレクター退任記念シンポジウム、2014/07/12-2014/07/12、金沢都ホテル、金沢(石川)

守屋三千代、認知言語学から見た日本文化 文化記号論入門 言語と文化の相同性を視野に入れて、ドイツVHS日本語教師研修会、2014/03/09、マルクトブライト研修所、マルクトブライト(ドイツ)

守屋三千代、日本語と日本文化における〈見立て〉：相同性を視野に入れて、北京日本学研究中心特別講演会、2013/12/26、北京日本学研究中心、北京(中国)

池上嘉彦、〈見え〉から〈見立て〉へそして〈相同性〉、北京日本学研究中心特別講演会、2013/12/26、北京日本学研究中心、北京(中国)

守屋三千代、〈見立て〉 日本文化のキーワード 国際共同研究を通して考察する、第4回東アジア日本研究フォーラム、2013/12/07、釜山ロッテホテル、

- 釜山（韓国）  
 IKEGAMI, Yoshihiko, 'Haiku' and the Japanese Language, Symposium: Japan and Europe in Global Communication, 2013/11/09, Mykolas Romeris University, Vilnius, Lithuania
- 守屋三千代、日本語の視点：〈見え〉から〈見立て〉へ 日本語話者にとって「見る」とは何か、北京大学国際シンポジウム：多言語における視点研究、2013/10/20、北京大学、北京（中国）
- 池上嘉彦、〈視点〉から〈事態把握〉へ 〈自己のゼロ化〉の言語学と詩学、北京大学国際シンポジウム：多言語における視点研究、2013/10/20、北京大学、北京（中国）
- 池上嘉彦、文化記号論、中・日・韓比較文化研究国際学術シンポジウム、2013/10/10、瀋陽航空航元大学、瀋陽、（中国）
- 池上嘉彦、守屋三千代、山口富蔵、テキメン・アイシェヌール、百留康晴、百留恵美子、〈見立て〉：送り手と受け手の間での意味創出の営み 文化記号論の試み、認知言語学会全国大会、2013/09/19、京都外国語大学、京都
- 池上嘉彦、〈事態把握〉の相対性 言語構造の比較対照から言語の話者の〈好まれる言い回し〉の比較対照へ、外国語と日本語の対照言語学的研究第10回研究会、2013/07/13、東京外国語大学、東京
- 21 IKEGAMI, Yoshihiko, 'Subject-Object Contrast and 'Subject-Object Merger' in Thinking for Speaking, Pre-International Cognitive Linguistics Conference 12<sup>th</sup> Symposium, 2013/06/21, University of Alberta, Canada
- 22 IKEGAMI, Yoshihiko, Homology of Language and Culture: A Case Study in Japanese Semiotics, 土日基金 25 周年記念大会、アンカラ（トルコ）
- 23 守屋三千代、〈見立て〉 日本語と日本文化を結ぶもの、土日基金 25 周年記念大会、アンカラ（トルコ）
- 24 IKEGAMI, Yoshihiko, 'Subject-Object Contrast and 'Subject-Object Merger' in Thinking for Speaking, 11<sup>th</sup> International Association for Semiotic Studies Congress, 2012/10/06, Nanjin Normal University, 南京（中国）
- 25 池上嘉彦、〈見え〉から〈見立て〉へ 身体性/主体性に根差す喩えの営みの認知言語学的基礎、日本認知言語学会全国大会、2012/09/08、大東文化大学、東京
- 26 守屋三千代、日本語話者の〈見立て〉、日本認知言語学会全国大会、2012/09/08、大東文化大学、東京
- 27 池上嘉彦、個別言語の認知言語学的研究 個別言語志向的な類型論へ向けて、文

法学研究会第6回集中講義、2012/08/18、東京大学（東京）

- 28 守屋三千代、モダリティをめぐる日中対照研究 〈事態把握〉の観点から、漢日対比言語学検討会、湖南大学、長沙（中国）
- 29 守屋三千代、日本語のモダリティ再考 〈事態把握〉の表現性から考える、日本語文法研究会、2012/05/20、北京大学、北京（中国）
- 30 池上嘉彦、認知言語学と翻訳研究、東京言語研究所、2012/04/14、東京言語研究所、東京

〔図書〕（計4件）

IKEGAMI, Yoshihiko, Vision and the Verbs of Visual Perception in *Man'yosyu* - From Mirativity to 'Mitate' De Gruyter Mouton (Berlin) 発表確定 Handbook of Historical Japanese Linguistics (ed. by B. Frellesvig et al.

IKEGAMI, Yoshihiko, Subject-Object Contrast and Subject-Object Merger in 'Thinking for Speaking': A Typology of the Speaker's Preferred Stances of Construal across Languages and Its Implications for Language Teaching De Gruyter Mouton (Berlin) Cognitive-Functional Approaches to the Study of Japanese as a Second Language (ed. by K. Kabata and K. Toratani) 2015 発表確定

池上嘉彦、自然と文化の記号論 遼寧人民出版社（中国）、294pp. 中日韓比較文化研究（全昌煥編）、著者：池上嘉彦ほか78名 2014/07 pp.1-6

IKEGAMI, Yoshihiko, Haiku and the Japanese Language: How to Come to Terms with the Shortest Literary Form in the World Mykolas Romeris University (Lithuania), 297pp. Japan and Europe in Global Communication (ed. by Kyoko Koma), 著者：D. Adomaviciute ほか18名 2014/05 pp. 178-189

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

守屋 三千代 (MORIYA, Michiyo)  
 創価大学・文学部・教授  
 研究者番号：30230163

### (2) 研究分担者

池上 嘉彦 (IKEGAMI, Yoshihiko)  
 東京大学名誉教授・昭和女子大学名誉教授  
 研究者番号：90012327